

## 岩井穂積 告別式 二〇二二年四月十一日

### 祈祷

天にいます子ども父なる神様、あなたは万物の創造者にいまし、世界の歴史を支配されるとともに、私ども小さきもの一人一人の生と死を宰ってい給うことを畏れをもって信じ、心から感謝いたします。

父なる神様、あなたは岩井穂積にいのちを与えて九六年に及ぶ長い生涯を祝福し、ここにその深い聖旨によって彼を御許にお召しになりました。

岩井穂積はその若き日に神を畏れることを知り、イエス・キリストの十字架の贖いによって罪を赦され、キリストの復活に与って限らない生命に恵まれました。彼はこの絶大な恵みに対する心からの感謝と主イエス・キリストに対する忠実な信仰をもって、あなたの定められた道を歩み通しました。いまや父なる神のふところに抱かれて、「死も悲しみも歎きも労苦もない」天の休息に入られたことを信じ、彼の靈魂をあなたの御手に委ねます。私どもは心からの感謝をもって彼に告別し、喜びをもって彼をあなたの許に送ります。

しかしながら、この地上に残された者はなお朽ちるものをまとって深い悲しみの中にあります。慈愛と慰めの父なる神様、どうぞ格別に静枝様はじめご遺族一同の上に、そして岩井穂積に愛され彼を愛してここに集っている者すべての上に、あなたの御慰めを豊かにお与え下さいますように切に祈ります。

天の父なる神様、どうぞこの時に当たって、地に落ちた一粒の麦である岩井穂積の生涯に習い、私ども一人

一人も来るべき終わりの日をもって厳肅に各自の「生涯の日を正しく数える」ことができますようにお導き下さい。この式を通してイエス・キリストの福音が宣べ伝えられ、出席者一同が神の祝福に与り、神の御名が崇められる折として下さいますように、私どもの救い主イエス・キリストの御名を通してお祈り申しあげます。

### 式辞

岩井穂積さんは一昨四月九日正午過ぎ逝去されました。一九一六年七月のお生まれですから満九六歳になろうという長寿のご一生でした。その三週間程前心臓の不調を訴えて入院もされましたが、退院されて自宅で静養中に、殆ど最後までしつかりと意識を保たれ、ご家族の配慮により会うべき多くの方々に会われ、皆様に囲まれて安らかに召されていかれたということです。死亡診断の病名は「老衰」ということですから、これは長寿社会の現代でも決して多くはない自然死という甚だ恵まれた尊敬すべき死にようであります。

長寿になったからこそか、人は「よく」死にたいと願うようになりました。余り苦しむことなくとか、他（は）に余り迷惑をかけずにとか、そして「よく死ぬためには、よく生きること」などと申します。そうであれば、岩井さんは正に「よく」生きた方でした。若き日に身を立て、昭和の「大戦」を生きぬき、戦後の苦難を克服し、岳父長谷川周治を最もよく形容する「前垂れがけの武士」を自らも目当てにして、堅実にして勤勉、独立的実業人として立派に活躍されたのであります。それは実に孤軍奮闘の生涯、内村鑑三の言う有名な「勇ましい高尚なる生涯（『後世への最大遺物』）でした。

しかし岩井さんのこの「奮闘」は、決して世の多くの人のように、自分の能力に頼って自分の為にする、い

わゆる「力行」の類ではなく、「人生の行路は神これを定め給う」とする神への絶対的信頼と、人の救われるのは人の善性、善行によるのではなく、ただイエス・キリストの贖いの御わざによるという破格の恵み信じて、謙虚に誠実に生きようとする真摯な願望のもたらしたものです。そして、そのような生が生み出したものが、岩井さんの広い視野、高い見識、深い洞察であり、ゆつたりとしてふくらみのある岩井さんの豊かな生活でした。

岩井さん忙しい家業の最中にもよく勉強し、よく思索し、決して多くはありませんが格調の高い文章を残しておられます。(例えば、お手許の「呼び声」一〇一九号、一九六九〇七五年のような)そこには実に広汎な信仰や科学や社会の諸問題が論じられ、厳しい批判とともに、彼の信仰であるキリストの福音の理解に基づく慰めと励ましが続いています。

岩井さんは一九四八年に長谷川静枝さんと結婚され、四人の子女に恵まれて、堅固で幸福な家庭を築かれました。特に子供さん方の教育には非常な意を用いられ、私などもその一端に関与する幸いを与えられたこともあって、こうした長い交友をいただくことができた次第です。

岩井さんが召されたと伺って、私は聖書の「族長たち」(古代イスラエル民族の父祖アブラハム、イサク、ヤコブ)を思わないわけにはいきませんでした。岩井ファミリーは今や四人のお子さん七人のお孫さんと、その周囲のご親族を合わせて一大ファミリーです。岩井さんは常にこの大ファミリーに深く心を寄せて、毎年お正月の家族会や夏の家族旅行などをなさいました。いつぞやご自分の故郷を子供さん方に紹介するととて山陰に大旅行をなさった折には詳細な報告のお便りをいただいたことをよく覚えております。まことに岩井さんは大族長でいらっしゃいました。

岩井さんが召される前日、私どもはご親切なお知らせをいただいて病床の岩井さんをお見舞い申しあげたのですが、その折、ご家族の皆様と共に岩井さんの愛唱歌だという讚美歌「三二二番」を枕辺で歌いました。先程ご一緒に歌ったものです。この歌は私どもが救い主と仰ぐイエス・キリストは「私どものいづくし深き友」にいますということを感じ、その喜びを歌うものです。岩井さんは、イエスが自分の友となつて下さった、自分にとってイエスこそ真の友であるという信仰を強くもつておられて、この歌を愛唱しておられたでしょう。このことは、岩井さんの人柄とその生き方をよく表わしていると存じます。

友とは、ひとりの人間として自他全く同等に相對している、そのような関係にある人のことです。イエスを友と仰ぐ岩井さんは誰に対してもよき友でありたいと願われたのです。静枝奥様はじめ家族の皆様に対してそうであったことは既に申した通りですが、誰に対しても、身内の方々、信仰の友人はもちろん、お仕事の関係の方、部屋を貸しておられた若い方々等々に至るまで、きつと多くの方々岩井さんの「友人」としての、折々には「族長」としての愛と親切に与った、その記憶をなつかしく思い起こされることと存じます。

最後に、これは後輩の私にはとても申せぬことです。岩井さんも私も共通に尊敬申しあげていた山本泰次郎先生(キリスト教独立伝道者)の「死」についてのご教示の一端を拝読して、私の式辞を終わります。

主イエス・キリストを信じ、朝夕に聖書を信じるクリスチャンが、もし死に対して、ただ徒らに歎き悲しむだけで、一片の希望と喜びをも抱き得ないとしたなら、実に奇妙不思議なことである。信者にとっては、死は、実は、天国への門出であり、かしこにキリストに会いまつるための旅立ちであり、天国で神のみ許に永遠の新しい、輝く生命に入る希望へ向かって飛び立つことである。生涯の信仰と希望と祈りとが、つ

いに叶えられることである。こんな目出たい、喜ぶべき事はないのである。故に信者にとっては、死の悲しみは歎喜であり、涙は悲しみの涙ではなく喜びの涙であるべきである。

これがわれらキリスト信者にとつての死の意義である。故にわれらは、生前から常に天国を望んで信仰に励み、死に直面して徒らに悲しみ嘆くことなく、むしろ喜び勇んで、天国へ凱旋すべきである。また愛する者を送る者も、徒らに信仰なき者のように嘆き悲しむことなく、涙の中にも、愛する者の凱旋を祝い、喜び、感謝しつつ、送るべきである。

「死の意義」より ( 『聖書講義』四〇三号 一九七九年二月号 )